

「子どものアート研究会」の紹介

北沢昌代
聖徳大学短期大学部



1. 地域連携

全美協メールマガジンがスタートして、今回で11号になるが、毎号、読者の一人として楽しみに拝読させて頂いている。内容の多くは、様々なスタイルで地域と連携し、課題に取り組んでいる実践の報告である。地域との連携は、アクティブラーニングの観点からも有効であり、大学の社会貢献にもつながる。また、教員としての指導力や実践力養成には地域との連携は欠かせないため、様々な環境の中で、アイデアや工夫をして取り組まれていることが分かる。

本学でも、文部科学省地(知)の拠点整備事業(平成25年度～29年度)の助成を受け、授業(「社会貢献の理論と実践」「地域貢献活動の実践」)の中で、学生が地域の保育施設や子育て支援施設にフィールドワークに出掛け、実践的に学ぶ取り組みを行っている。

筆者も25年度より造形表現を中心に地域保育者と学生で学び合う「子どものアート研究会」を組織し、地域の子育て力向上と学生の実践力養成を目的に活動を行ってきた。活動内容は、地域保育者や学生と話し合いながら、現場の保育に何が必要かを考え、試行錯誤しながら様々な企画を行ってきた。ここで「子どものアート研究会」5年間の活動を振り返り、実践内容を紹介する。

子どものアート研究会

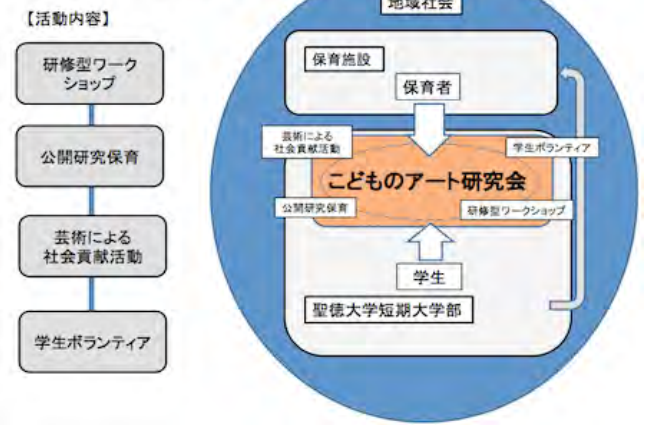


図) 「子どものアート研究会」活動概念図

2. 「子どものアート研究会」

「子どものアート研究会」は、上記のように地域保育者と学生有志で組織している。造形活動の特色は、異なる立場、年齢であっても共同で行うことができ、互に学び合える。このような特性を生かし、保育者と学生と一緒に活動を行っている。学生にとっては、先輩保育者の指導方法を直接学び取ったり、自分の将来像をイメージしたりすることができる。また、保育者にとっても、学生から新しいアイデアや新たな刺激を受けることができる。

このようなwinwinの関係を築きながら行ってきた実践を、以下のような内容に分類し、活動の在り方を振り返った。

① 研修型ワークショップ

外部講師を招き、造形表現を通して質の高い題材の提案や活動の楽しさ、子どもたちの学びの過程を体験を通して実感することができ、保育者と学生が互いに学びあえる活動である。(H25年度「粘土を使った活動を考える」小串里子講師、H28年度「おえかきワークショップ 空想松戸屏風絵巻物語」矢生秀仁講師、29年度「障害のある子どもたちのためのアートワークショップ」杉山貴洋講師他)



H25年度「粘土を使った活動を考える」小串里子講師



H28年度「おえかきワークショップ 空想松戸屏風絵巻物語」矢生秀仁講師



② 公開研究保育

地域保育者が自分たちの課題に取り組み、研究保育を行う。学生、教員、保護者や市民などに公開し、終了後は全員で研究討議を行う。保育者のみの研究会とは異なり、保護者に対しては、日常の保育では伝えづらい研究的な側面や、真剣に造形活動に取り組むわが子の姿を伝えたりすることができた。学生にとっても、ベテラン保育者の実践する質の高い保育を見学することができ、指導のねらいや指導技術を学び取ったり、保護者の意見を聞くことができたりする貴重な機会になる。地域連携の良さを生かした実践と言える。

(H26 年度「つくりたいものつくろう」石川康代、高木優里、生沼友香、大和田友紀美指導、H27「土粘土でつくろう」石川康代、高木優里他指導)



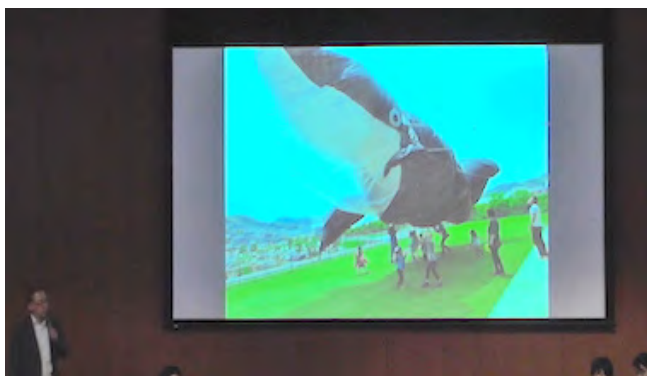
H26 年度「つくりたいものつくろう」

石川康代、高木優里、生沼友香、大和田友紀美指導

H27「土粘土でつくろう」石川康代、高木優里他指導

③ 芸術による社会貢献

アーティストを招き、子どもたちにワークショップを実施することにより、芸術を主体とした地域貢献を行った。また、保育におけるアーティストの社会貢献の意義や重要性を広く伝えるため、シンポジウムや公開討論会等を行ってきた。(H26 年度「芸術と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」高松市芸術士 太田絵美子、阿部麻海、伊藤修子 H27 年度「アーティストがやってくる! in 北部幼稚園」もび、モモンガコンプレックス、大成哲雄他)



H27 年度「アーティストがやってくる! in 北部幼稚園」もび、モモンガコンプレックス、大成哲雄他

H26 年度「芸術と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」ワークショップ及びシンポジウム 高松市芸術士 太田絵美子、阿部麻海、伊藤修子他

④ 学生ボランティア

学生たちが地域の保育施設でワークショップを行ったり、保育補助としてボランティアを行ったりしている。活動開始当初は、教師が声を掛け、やっと集まっていた学生であるが、最近では先輩から活動の楽しさが伝わり、人気の研究会になっている。学生が企画したワークショップも29年度は5回実施され、自由に保育所に行く保育補助ボランティアは、延べ100人を超えた。保育者、学生、大学側にとってもwinwinの関係が築ける活動になっている。(H25～H29 「わくわくペタペタ秋のスケッチボード」「スライム遊び」「マラカスを作って遊ぼう」「地域盆踊りへのワークショップ出店」「カラフルスティックで遊ぼう」「クリスマスのかざりをつくらう」等)



①



②



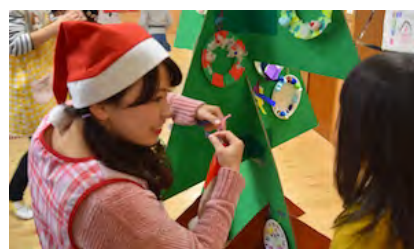
③



④



⑥



⑤

- ①「わくわくペタペタ秋のスケッチボード」②「スライム遊び」③「マラカスを作って遊ぼう」④「地域盆踊りへのワークショップ出店」
⑤「カラフルスティックで遊ぼう」⑥「クリスマスのかざりをつくらう」

3. まとめと今後の課題

「子どものアート研究会」の活動内容は、保育者や学生と話し合いながら、現場の保育に何が必要かを考え、スタイルに拘らず様々な企画を試行錯誤しながら実施してきた。どれも、一つだけの活動では、地域の子育て力向上や学生の実践力養成の成果を示すことは難しく、様々な活動が重なり、継続して行われることで目に見える成果が表れていると考えている。研究がスタートした当初は、ボランティアの学生を集めるのにも苦労したが、最近では多くの学生が「子どものアート研究会」の活動が楽しいと参加した先輩から伝わり、人気の研究会になってきた。研修型ワークショップも、制作、ディスカッションなど、保育者が抱える共通課題について様々な方法で実施し、少しずつ成果が表れていると考えている。

また、学生が「子どものアート研究会」の活動を通して地域と関わり、造形表現を中心とした学外活動で保育者としての資質・能力を育んでいることは、指導する教員として実感していたが、それらをエビデンスとして示す為、28年度研究より川村学園女子大学桂瑠依准教授の協力を得て、学外活動を通して獲得する学生の資質・能力について学士力の観点からアンケート調査を行っている。学生は、学士力の中でも特に「チームワーク、リーダーシップ」「コミュニケーションスキル」「総合的な学習経験と創造的思考力」が高まったとの分析結果(T検定)が示されたが、このような学外活動には様々な方法スタイルがあるため、今後は、活動ごとの結果を分析して学外活動の在り方や質の向上が図れるよう検討する計画である。